

**YAMAHA**

**TX802**

FM TONE GENERATOR

取扱説明書

## ごあいさつ

このたびは、YAMAHA FMトーンジェネレーターTX802をお買い求めいただきまして、まことにありがとうございます。

TX802はFM音源を採用したMIDI対応の音源モジュールです。ヤマハDXシンセサイザー (DX7, DX7 II, DX100, DX21 など) やKXキーボード (KX5, KX88 など) をはじめとするMIDIキーボードやヤマハQXシーケンサー (QX21, QX5 など)、コンピュータ (CXシリーズ) などに接続することにより、FM音源のすばらしいサウンドを楽しむことができます。

TX802の優れた性能を使いこなしていただくとともに、末長くご愛用いただくために、ご使用前にこの取扱説明書をよくお読みくださいますようお願いいたします。

# 目次

---

## この取扱説明書の読み方

<b>第1章</b>	<b>お使いになる前に</b>	
	●TX802 の特長 .....	6
	●使用上のご注意 .....	7
	●各部の名称と働き .....	9
	●TX802 の用途と接続の方法 .....	13
	●電源の入れ方と切り方 .....	16
<b>第2章</b>	<b>まず、音をだしてみよう</b>	
	●MIDIキーボードを使う場合 .....	18
	●シーケンサーを使う場合 .....	20
<b>第3章</b>	<b>TX802 の基礎知識</b>	
	●ボイスとパフォーマンスについて .....	24
	●モードについて .....	28
	●演奏するモードについて .....	30
	●パフォーマンスの選択 .....	32
	●いろいろな項目の指定方法について .....	35
	●コンペアの使い方 .....	41
	●カートリッジについて .....	42
<b>第4章</b>	<b>パフォーマンスの作成</b>	
	●パフォーマンスの作成について .....	48
	●パフォーマンスの選択 .....	49
	●パフォーマンスのイニシャライズ .....	50
	●ボイスの構成の設定 .....	51
	●パフォーマンスの細かな設定 .....	55
	●パフォーマンスの保存 .....	65
<b>第5章</b>	<b>ボイスの作成</b>	
	●ボイスのしくみ .....	72
	●ボイスの作成について .....	75
	●ボイスの選択 .....	76
	●ボイスのイニシャライズ .....	78
	●ボイスの作成 (I) .....	79
	●ボイスの作成 (II) .....	105
	●ボイスの保存 .....	116

<b>第6章</b>	<b>パフォーマンス、ボイス作成のヒント</b>	
	●パフォーマンス作成のヒント	124
	●ボイス作成のヒント	130
<b>第7章</b>	<b>その他の機能</b>	
	●システムの設定	136
	●ユーティリティの使い方	151
<b>第8章</b>	<b>MIDIについて</b>	
	●MIDIとは	164
	●チャンネル	165
	●シーケンサーのチャンネル	166
	●鍵盤を弾いたときの情報	168
	●その他の演奏情報	170
	●パフォーマンスやボイスなどの情報	171
<b>第9章</b>	<b>こんな場合には</b>	
	●故障かな?と思ったら	176
	●エラーメッセージが表示されたら	179
<b>第10章</b>	<b>付録</b>	
	●カートリッジについて	182
	●音源別アウト端子の使い方	186
	●他の機種との互換性	188
	●32種類のアルゴリズム	190
	●プリセットボイス	192
	●お買い上げのときに設定されているパフォーマンス	193
	●イニシャライズされたパフォーマンスの設定	197
	●イニシャライズされたボイスの設定	198
	●メモリーの構成	199
	●MIDIデータフォーマット	200
	●MIDIインプリメンテーションチャート	214
	●仕様	215
	●パフォーマンスデータブランクチャート	216
	●ボイスデータブランクチャート	217
<b>索引</b>		
	●索引	220
	●ディスプレイからの索引	225

# この取扱説明書の読み方

この取扱説明書は、第1章～第10章で構成してあります。  
お使いになる方の経験に合わせて、次のようにお読みください。

章のタイトル	おもな内容	はじめてTX802をお使いになる方	FM音源のことは、ある程度分かる方	TX802をかなり使っている方
第1章 お使いになる前に	TX802を使う前に覚えておいて欲しいことを説明します	必ずお読みください		特にお読みになる必要はありません
第2章 まず、音を出してみよう	基本的な操作で実際に音を出す手順を説明します	必ずお読みください		特にお読みになる必要はありません
第3章 TX802の基礎知識	基礎的な知識や使い方を説明します	必ずお読みください		必要に応じてお読みください
第4章 パフォーマンスの作成	パフォーマンスの作り方を説明します	必ずお読みください		必要に応じてお読みください
第5章 ボイスの作成	ボイスの作り方を説明します	必ずお読みください	簡単に目を通しておいてください	必要に応じてお読みください
第6章 パフォーマンス、ボイス作成のヒント	より進んだパフォーマンスやボイスを作るためのヒントを紹介します	必要に応じてお読みください		
第7章 その他の機能	システムの設定などの機能を説明します	必要に応じてお読みください		
第8章 MIDIについて	MIDIやMIDIを使った外部機器との関係を説明します	必ずお読みください		必要に応じてお読みください
第9章 こんな場合には	エラーやTX802が動かないときの対処の方法を説明します	必要に応じてお読みください		
第10章 付録	MIDIの規格表などを載せてあります	必要に応じてお読みください		

# 第1章

## お使いになる前に

この章では、TX802をお使いになる前に知っておいて欲しいこと、注意しなければならないことなどを説明します。TX802の電源を入れる前に必ずお読みください。

●TX802 の特長 .....	6
●使用上のご注意 .....	7
●各部の名称と働き .....	9
●TX802 の用途と接続の方法 .....	13
●電源の入れ方と切り方 .....	16

# TX802の特長

TX802はMIDI規格の音源モジュールで、次のような多くの特長を持っています。

- FM音源方式

DX7 など高い評価を得たFM音源方式を音源として採用しています。このため、ナチュラルでクリアなサウンドをお楽しみいただけます。

- 16音／8音色の同時発音が可能

同時に音を16音まで出すことができます。またこの16音を2音ずつ8つに分け、それぞれ別の音色を割り当てることができます。すなわち、16音を1音色から最大8音色まで使い分けることができます。

- プリセット128音色

本体にはあらかじめ128種類のプリセット音が内蔵されています。プリセット音はピアノからブラス（金管楽器）、効果音にいたるまでさまざまな音色が用意されており、どれもそのまま使用できる高いクオリティです。また、このプリセット音を加工（エディット）して別の音色として保存することもできます。

- 64音色、64パフォーマンスの本体メモリーとカートリッジメモリー

本体にはプリセット音以外にユーザーが作成した音色を64種類まで保存（ストア）しておくことができます。また、パフォーマンスと呼ばれる音色の使い分けの設定も64種類まで保存しておくことができます。このため、ライブなどで音色切り換えを簡単にスムーズに行うことができます。また、カートリッジを使うことによって、さらに64音色、64パフォーマンスの保存が可能となります。カートリッジ内に保存された音色やパフォーマンスも本体内蔵の音色やパフォーマンスと同様にすばやく使うことができ、256音色、128パフォーマンスを瞬時に切り換えて使用することができます。

- 豊富なMIDIコントロール機能

外部機器によってTX802を演奏させることをはじめ、鍵盤情報以外にもさまざまなメッセージを送受信することにより、自由に音色やパフォーマンスを設定することができます。

- DXシンセサイザーとの互換性

6オペレーター方式のDXシンセサイザーシリーズ（DX7、DX7 II、DX5、DX1など）との音色データの互換性があり、MIDIコントロールやカートリッジなどにより、音色データをやりとりできます。

- 8系統の出力端子

通常のステレオ2チャンネルの出力とは別に、音色別に最大8つの独立した出力を行うことができますので、マルチトラック録音やエフェクト処理にたいへん便利です。

- マイクロチューニング機能

TX802は鍵盤ごとにチューニングを行うことができます。さらに通常の平均律以外に純正律やペルクマイスターなどの調律が用意されていますので、美しいハーモニーを得ることができます。

## MIDIについて

MIDIとは Musical Instrument Digital Interface の略で、演奏情報や音色情報などを機器間でやりとりするための規格のことです。TX802の場合は外部のMIDI規格のキーボード、シーケンサーなどから、音の高さ、弾いた強さ（ベロシティ）などの情報を受け取って音を出します。また音色の変更などの情報も送ることも可能です。くわしくは 171ページをご覧ください。

## 第1章 お使いになる前に

# 使用上のご注意

---

TX802は精密な電子機器です。次のことに注意して大切に扱ってください。

- 設置場所について

次のような場所でご使用になりますと、故障などの原因となりますのでご注意ください。

- 窓際など直射日光の当たる場所
- 暖房器具のそばなど極端に温度の高い場所
- 極端に湿度の高い場所
- ホコリの多い場所
- 振動の多い場所

- 電源について

- 電源は必ずAC100Vを使用してください。AC100V以外の電源は絶対に使用しないでください。
- 長時間ご使用にならない場合は電源コードを電源コンセントから抜いておいてください。
- 落雷などの恐れがある場合は電源コードを電源コンセントから抜いておいてください。
- 消費電力の大きな機器と同じコンセントを使用したり、タコ足配線をするとう音質が劣化することがありますので注意してください。

- 電源スイッチを入れる順番について

電源スイッチはMIDIの送信側（キーボード、シーケンサーなど）から“ON”にし、その後に本機を“ON”にします。アンプなどのスイッチは最後に“ON”にしてください。

- 接続について

再生するスピーカーなどの破損を防ぐために、接続作業は本機および接続する機器の電源を切った状態で行ってください。

- MIDIケーブルについて

- MIDIケーブルは、MIDI規格のものをお使いください。
- MIDIケーブルの長さは15mが限度とされています。これ以上長いケーブルをご使用になりますと、トラブルの原因となりますので注意してください。

- 取り扱い、移動について

- キー、スイッチ、入出力端子などに無理な力を加えることは避けてください。
- コード部分の断線やショートを防ぐため、コード類をはずすときは、必ずプラグ部分を持って抜いてください。
- 本機を移動するときは、コード類の断線やショートを防ぐため、電源コードや接続コードを全てはずしてから行ってください。

- 外装のお手入れについて

- 汚れなどのお手入れの際は、柔らかい布で乾拭きしてください。
- ベンジンやシンナーなどの揮発油で外装を拭いたり、近くでエアゾールスプレーを散布することは避けてください。



## 使用上のご注意

### ●他の電気機器への影響について

本機はデジタル回路を多く使っているため、近くのテレビやラジオに雑音などが生じることがあります。この場合は十分に距離を離してお使いください。

### ●バックアップバッテリーについて

本機は電源がコンセントからはずされている状態でも、音色データやパフォーマンスデータを保存するためにバックアップバッテリーを内蔵しています。

このバックアップバッテリーの寿命は約5年です。バックアップバッテリーの寿命がくると、音色データやパフォーマンスデータは消えてしまいます。随時別売りの RAMカートリッジにデータを保存しておいてください。バックアップバッテリーの寿命がきたら、お買い上げ店か弊社電音サービスセンターにバッテリーの交換をお申し出ください。

なお、バッテリー交換の際に本体に保存されている音色データ、パフォーマンスデータは消されてしまいますので、あらかじめRAMカートリッジなどにそのデータを保存しておいてください。

### ●改造について

本機を改造したり、内部を開けたりすることは故障の原因や事故につながりますので、絶対にしないでください。改造された後の保証はいたしかねます。

### ●保証書の手続きと本書の保管について

- お買い求めの際、購入店で必ず保証書の手続きを行ってください。保証書に販売店印がありませんと、保証期間中でもサービスが有償になることがあります。
- この取扱説明書は保証書とともに大切に保管してください。

インターナルパフォーマンス（ユーザが自分で作った音などをおもに保存しておく場所）には、お買い上げの時点でヤマハが厳選したデータが入っています。

このデータを後になっても使うことができるように、パフォーマンスを作る前に別売のRAMカートリッジに保存しておくことをおすすめします。

この操作の手順は43ページで説明します。

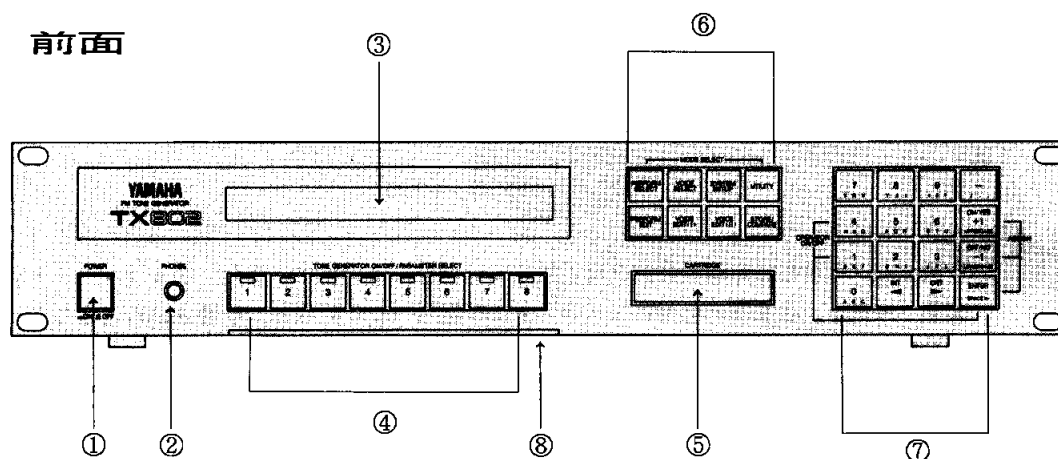
MIDI規格確定前に製造された下記の製造番号(SER. NO.)のDX7, KX1 とMIDIケーブルで接続する場合、アフタータッチが効かないなどの問題が生じることがありますので、お買い上げ店か弊社電音サービスセンターにご相談ください。

DX7 : SER. NO 1001 ~ 24880, 25125 ~ 26005

KX1 : SER. NO 1001 ~ 1088

# 各部の名称と働き

TX802の各部の名称とその働きを簡単に説明します。詳しくは実際にその部分を使うときに説明します。



## ① パワースイッチ (POWER)

電源スイッチです。押し込んだ状態でオンとなります。

このスイッチをオンにすると、③のディスプレイが点灯します。(16ページ参照)

## ② ヘッドホンジャック (PHONES)

ヘッドホンの差し込み口です。標準ステレオプラグのヘッドホン用で、後面のOUTPUT端子の I II がヘッドホンの左、右にそれぞれ対応しています。

(ヘッドホンはインピーダンス  $8\Omega \sim 150\Omega$  のものをお使いください)

## ③ ディスプレイ (LCD)

音色などのさまざまなデータが表示されます。TX802ではこのディスプレイの表示を見ながら音色などのデータを作成していきます。横40文字、縦2行の文字を表示することができます。電源スイッチをオンにすると、このディスプレイが黄色く点灯します。

## ④ 音源オン/オフ、パラメーターセレクトキー (TONE GENERATOR ON/OFF/PARAMETER SELECT)

同時に出せる16音の中で、特定の音を切ったり、出したりするスイッチです。(31ページ参照)  
また、音色などのデータを設定するときに、設定項目を切り換えるときにも使います。(35ページ参照)

このキーについている赤いインジケータはノートオンの情報を受信すると点滅します。

## ⑤ カートリッジスロット

ROMカートリッジやRAMカートリッジ (RAM4) を使用するときの差し込み口です。

DX7、DX1、DX5、RX11で使われているタイプのカートリッジは直接使用することはできません。これらのカートリッジを使う場合は別売のカートリッジアダプター (ADP1) をお使いください。

(182ページ参照)

## 各部の名称と働き

---

### ⑥ モードセレクトキー (MODE SELECT)

音色の変更や作成、パフォーマンスの変更や作成など、TX802での作業をおおまかに選択するキーです。このキーで選択した作業に関する内容がディスプレイに表示されます。

### ⑦ 数字キー部

TX802の細かな設定や変更はこれらのキーを使って行います。

これらのキーは大きく4つに分けられます。

#### (1) [0] ~ [9] キーおよび [-] キー

音色データなどの設定値や音色名など指定するときに使います。また、アルファベット52文字（大文字、小文字それぞれ26文字）および記号（#, +, & など）を書き込むときにも使用します。（40ページ参照）

また、[1] ~ [6] のキーは [ENTER] キーと同時に押して、オペレータのオン/オフを切り換えるときにも使用します。（83ページ参照）

#### (2) [←] [→] キー

音色データなどの設定箇所（カーソル(◀や▶)が点滅している位置）をディスプレイ上で左右に移動します。（[ENTER] キーと同時に使用する場合もあります。37ページ参照）

また、インターナルパフォーマンスとカートリッジパフォーマンスやインターナルボイスとカートリッジボイスなどを切り換えるときにも使用します。（33ページ参照）

#### (3) [+1] [-1] キー

音色データなどの設定値を増減するときに使用します。また、ディスプレイの状態によってはオン/オフの選択、はい (YES) / いいえ (NO) の選択などもこのキーで行います。

また、アルファベットを書き込む場合にこのキーで大文字、小文字の切り換えを行います。（40ページ参照） [ENTER] キーと同時に使用する場合もあります。（53ページ参照）

#### (4) [ENTER] キー

音色データなどの設定値を直接(1)のキーを使って数字で書き込んだ場合に、最後にこのキーを押します。6つのオペレータのオン/オフを選択するときなどにもこのキーを使います。（83ページ参照）

また、このキーを押しながらキーボードを弾くと設定、変更できる項目もあります。

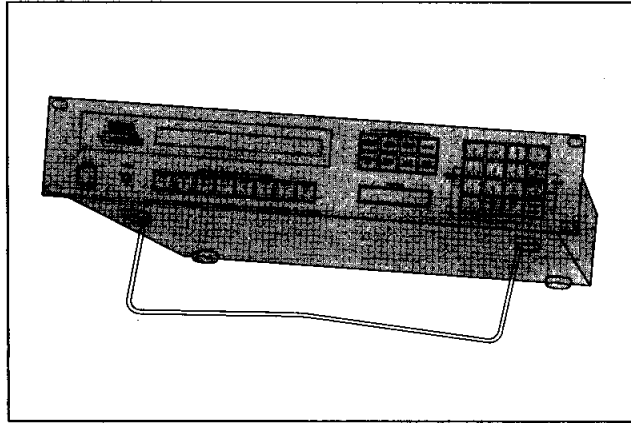
### ⑧ ガイドシート

TX802を操作するときに便利のように、重要なポイントやアルゴリズム、各モードのメニューの内容などを印刷したシートです。手前に出っ張った部分を持って引き出してご覧ください。

## 各部の名称と働き

---

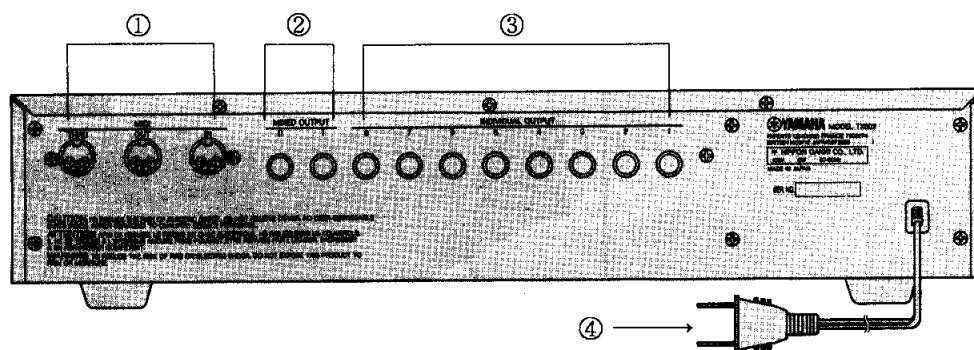
- ※ 本体の下側（底）には、TX802をななめにして使うことができるように足が付いています。必要に応じて、その足を手前に立ててお使いください。



- ※ 前面パネルの両端の穴は、ラックに取り付けるためのものです。ラックには19インチ2Uの規格以上のものをお使いください。

## 各部の名称と働き

### 後面



#### ① MIDI端子 (MIDI IN, OUT, THRU)

MIDI規格のケーブルの差し込み口です。端子には“IN”、“OUT”、“THRU”の3つがあります。  
“IN”はMIDI入力、“OUT”はMIDI出力、“THRU”はMIDI入力の信号をそのまま出力する端子です。

#### ② ミックスアウト端子 (MIXED OUTPUT I, II)

TX802は音色ごとにI、II、I IIの3つから選択して音を出力することができます。Iを選択した音はこのIの端子から、IIを選択した音はIIの端子から、I IIを選択した音はIとIIの両方の端子から出力されます。(59ページ参照)

#### ③ 音源別アウト端子 (INDIVIDUAL OUTPUT)

パフォーマンスで設定された音別(音源別)の出力端子です。

音色別に録音したり、ある音だけにエフェクト処理をする場合などに使用します。(186ページ参照)

#### ④ 電源プラグ

電源コンセントに差し込みます。電源は必ずAC100Vをお使いください。

# TX802の用途と接続の方法

TX802はMIDI規格の音源モジュールですので、目的によってさまざまな使い方が考えられます。ここでは代表的な使い方について、接続方法を含めて説明します。

## MIDIキーボードでTX802を使う場合

MIDI出力を持つキーボードの音源としてTX802を使う方法です。キーボードはそれ自体で音源を持っている機種(DX7, DX7 II, DX5など)でも、持っていない機種(KX5, KX88など)でもかまいません。

### ●用途の例

- (1) 音源を持たないキーボードの音源として使用する。
- (2) 音源を持つキーボードの拡張音源として使用し、ひとつのキーで複数の音色を出せるようにしたり、より多くの音色を自由に使えるようにする。
- (3) キースプリット機能のないキーボードの、キースプリット機能の使える音源として使用する。(キースプリットとは、あるキーを境にその上下で音色を変える機能です)

### ●接続の方法

- ① TX802およびTX802に接続する機器の電源スイッチがオフの状態になっていることを確認します。
- ② キーボードの“MIDI OUT”端子とTX802の“MIDI IN”端子をMIDIケーブルで接続します。
- ③ TX802のミックスアウト端子のI (MIXED OUTPUT I) に次に示すような機器を接続します。音色ごとに出力を左右にふり分ける場合には、さらにミックスアウト端子のII (MIXED OUTPUT II) にも同様に接続します。

#### TX802のOUTPUTに接続できる機器

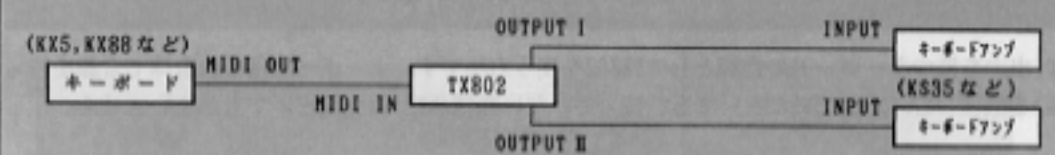
- キーボードアンプ (KS35など) のようなスピーカ付きアンプ。または、スピーカとアンプのセット。
- MTR (CMX1などのマルチトラックレコーダー) やカセットデッキ類。ただし、必ずライン入力端子に接続してください。マイク入力端子に接続するとその機器が壊れる恐れがあります。  
また、カセットデッキなどの場合は「標準プラグ」から「ピンプラグ」に変えるコードが必要となります。
- ミキサー類。必ず、ライン入力端子に接続してください。

音源別に出力したい場合は、8つの音源別アウト端子 (INDIVIDUAL OUTPUT) の中から必要な端子を使って接続します。(186ページ参照)

## TX802の用途と接続の方法

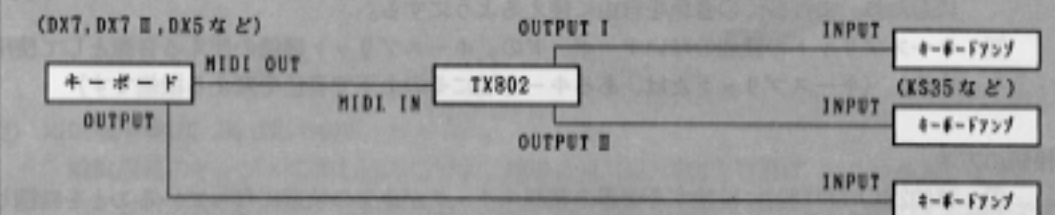
### ●接続例

音源を持たないキーボードと接続する場合

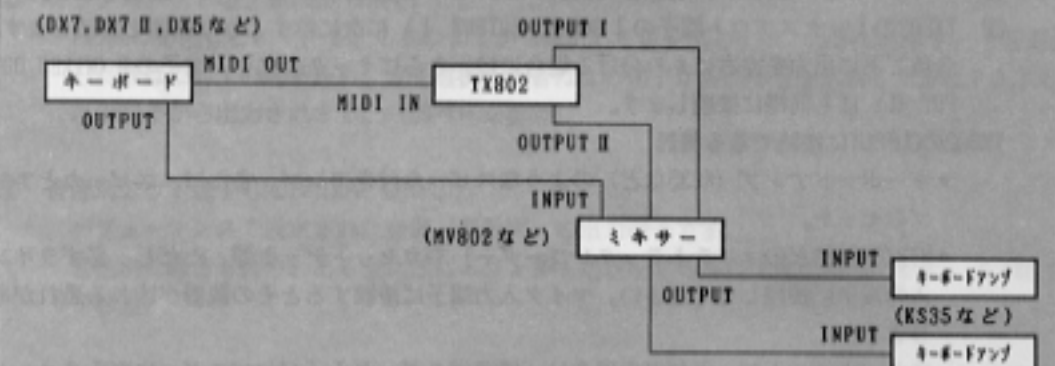


音源を持つキーボードと接続する場合

例1



例2



※ TX802のミックスアウト端子のIまたはIIのいずれかだけをキーボードアンプと接続してもかまいません。ただし、この場合は接続されていない方に出力される音は出ません。

## TX802の用途と接続の方法

### シーケンサーでTX802を使う場合

シーケンサーの再生音源としてTX802を使う方法です。コンピュータ（CXシリーズなど）とシーケンスソフトウェア（YRM-55など）の音源として使用する場合も使い方は同様です。

#### ●用途の例

MIDI規格のシーケンサー（QX5, QX21, QX1 など）の音源として、TX802を使います。

TX802は8種類の音色を同時に使うことができ、それぞれのMIDI受信チャンネルを1～16（またはオムニオン）の中から選択することができますので、シーケンサーに書き込まれている8つのトラックを同時に再生することができます。（ただし、この場合は各チャンネルとも最大同時発音数は2音となります）

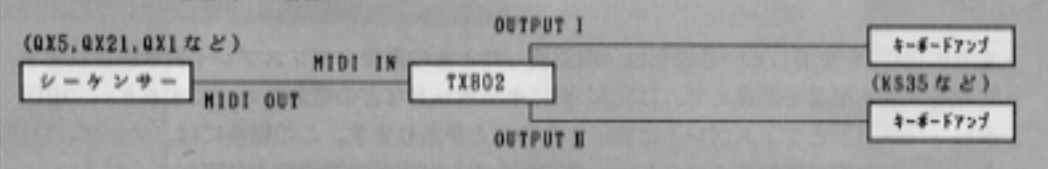
#### ●接続の方法

- ① TX802およびTX802に接続する機器の電源スイッチがオフの状態になっていることを確認します。
- ② シーケンサーの“MIDI OUT”端子とTX802の“MIDI IN”端子をMIDIケーブルで接続します。
- ③ TX802のミックスアウト端子のⅠ（MIXED OUTPUT Ⅰ）にキーボードアンプなどの機器を接続します。音色ごとに出力を左右にふり分ける場合には、さらにミックスアウト端子のⅡ（MIXED OUTPUT Ⅱ）にも同様に接続します。  
TX802のOUTPUTに接続できる機器については前項「MIDIキーボードでTX802を使う場合」の「接続の方法」をご覧ください。

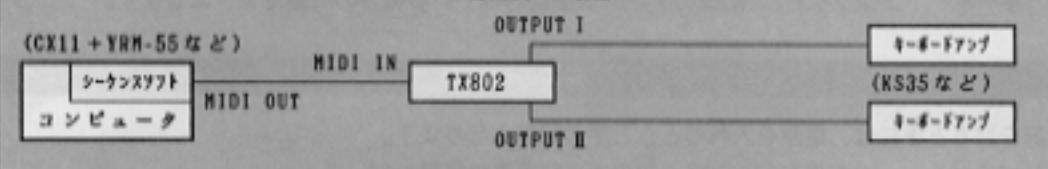
音源別に出力したい場合は、8つの音源別アウト端子（INDIVIDUAL OUTPUT）の中から必要な端子を使って接続します。（186ページ参照）

#### ●接続例

##### シーケンサーと接続する場合



##### コンピュータ+シーケンスソフトウェアと接続する場合



※ TX802のミックスアウト端子のⅠまたはⅡのいずれかだけをキーボードアンプと接続してもかまいません。ただし、この場合は接続されていない方に出力される音は出ません。



# 電源の入れ方と切り方

## 電源の入れ方

MIDIを使ったシステムでは、一般的に電源スイッチを入れる順番に次のような2つの規則があります。

(1) MIDIの送信側の機器から順番にオンにする。

(2) キーボードアンプ類の電源は最後にオンにする。

(1)はMIDI信号の流れを確実にするため、(2)はアンプに付けられているスピーカを保護するためです。

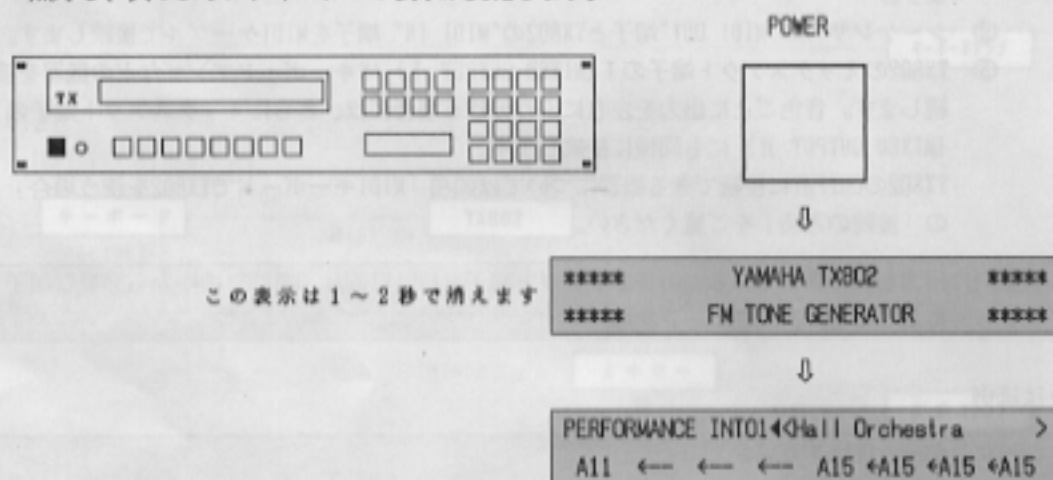
TX802を使った通常のシステムの場合は次のような手順で電源スイッチをオンにしてください。

① 各機器の電源コードが電源コンセントに差し込まれていることと、各機器間の接続が正しいことを確認します。

② MIDIキーボードまたはシーケンサー、コンピュータなどの電源をオンにします。

③ TX802のパワースwitchをオンにします。

パワースwitchは押し込まれている状態がオンの状態です。オンにするとディスプレイが黄色く点灯し、次のようにディスプレイ表示が変化します。



- すでにTX802を使用している場合は、前回使ったときの最後のディスプレイ表示が表れます。
- 電源を入れる順番を間違えて、TX802の後にキーボードなどの電源をオンにすると、“MIDI data error !”とディスプレイに表示されることがあります。この場合には、アンプ、TX802、キーボードの順に電源をオフにして、最初から正しい手順で電源を入れ直してください。

④ キーボードアンプなど、TX802のOUTPUTに接続されている機器の電源をオンにします。

## 電源の切り方

電源を切るときには、電源を入れるときと逆の順番となります。

アンプのボリュームを最小にした後、次のような順番で電源を切ってください。

アンプ → TX802 → キーボードまたはシーケンサー

## 第2章

# まず、 音を出してみよう

この章では、とにかくTX802の音を実際に感じていただくために、簡単な操作方法を説明します。  
また、ここで説明する操作は全ての操作の基本となることですので、しっかり覚えてください。

- |                       |    |
|-----------------------|----|
| ●MIDIキーボードを使う場合 ..... | 18 |
| ●シーケンサーを使う場合 .....    | 20 |

# MIDIキーボードを使う場合

MIDIキーボードを使って、実際にTX802で音を出してみましょう。

まず、第1章の「TX802の用途と接続の方法」を参考にして、TX802を正しく接続してください。  
続いて次のような操作を行います。

## 音を出してみよう

### ① 各機器の電源を入れます。

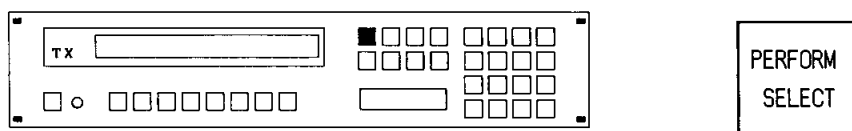
第1章の「電源の入れ方と切り方」を参考にして正しい手順で電源を入れてください。

ディスプレイ表示は次のようになります。

この表示を確認してください

PERFORMANCE INT01 Hall Orchestra									
A11	←	←	←	A15	←	A15	←	A15	←

すでに、TX802を使用している場合には、前回の使用で電源を切る直前のディスプレイ表示になります。上のような表示にするには[PERFORM SELECT]（パフォーマンスセレクト）キーを押します。



### ② キーボードの鍵盤を押すと音が出ます。（ホールオーケストラの音です）

- この状態では8和音まで出せる設定になっています。鍵盤を弾くたびにディスプレイ下のキーのインジケータが点滅します。

#### 音が出ない場合

MIDIケーブルで多くの機器が接続されていると、「あれっ音が出ない!」といったことがしばしば起こります。でも、あわてないでください。落ち着いてゆっくり、音の出ない原因を捜しだし、適切に対処してください。考えられる原因としては次のようなものがあります。

- (1) 電源が入っていない。
- (2) 接続が間違っている。
- (3) 接続がはずれている。
- (4) キーボードアンプなどのボリュームが上がっていない。
- (5) キーボードの設定が適切でない。(MIDI送信チャンネルなどの設定)
- (6) TX802のパフォーマンスの設定やボイスの設定(MIDI受信チャンネルや内部ボリュームなどの設定)が適切でない。

TX802に直接ヘッドホンをつないで、音が出れば上の(1)~(4)が原因と考えられます。

キーボードを弾いてMIDI信号がTX802に入力されると、ディスプレイ下の①~⑧のインジケータが点滅します。点滅しない場合は、(5)または(6)が原因と考えられます。(5)の場合はキーボード付属の取扱説明書を参考にして、正しくMIDIデータが出力されるように設定してください。(プリセットパフォーマンスのMIDI受信チャンネルは1になっています)以前にTX802を使用した場合には(6)が原因であることも考えられます。3章以降を参考にして対処してください。

## 第2章 まず、音を出してみよう

## MIDIキーボードを使う場合

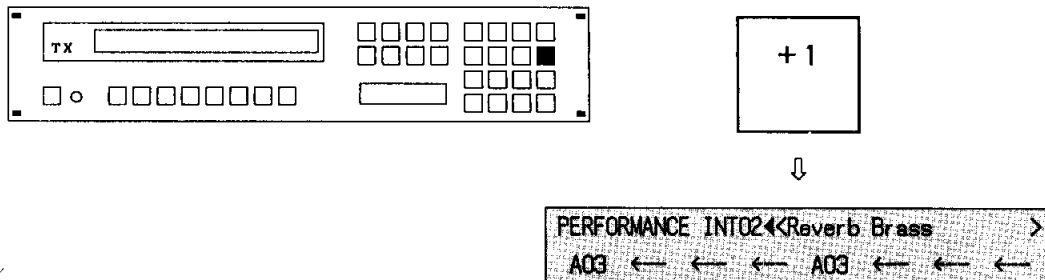
### 音色を変えてみよう

前ページの操作で音が出たら、今度は音色を変えてみましょう。

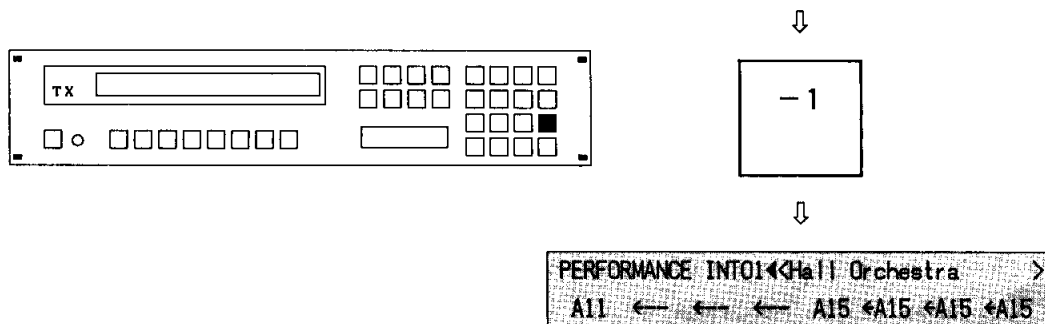
[+1] キーを押します。

音色が変わります。

- 後で説明しますが、この操作は「パフォーマンスの選択」という操作です。



- [-1] キーを押すと、元の音に戻ります。



- [+1] キー、[-1] キーを使って、さまざまな音（パフォーマンス）を楽しんでみてください。（INT01～INT64 の範囲で変更することができます。入っているパフォーマンスの内容については 193ページをご覧ください）
- この手順で出すことのできる64種類の音色の組合せは、あらかじめ TX802の内部に保存されているインターナルパフォーマンスというものです。（パフォーマンスについては第3章で詳しく説明します）
- さらに、接続したMIDIキーボード側の操作で、TX802の音を切り換えることもできます。（171ページ参照）

さて、TX802の豊富な種類の音を体験できたと思います。TX802はさらにこれらの音の組合せを変更したり、音自体を加工したり、全く新しい音を作ったりすることができます。また、その他にもさまざまな機能があります。これらの機能を使う前に、覚えておいてほしいことを3章で説明します。

## 第2章 まず、音を出してみよう

# シーケンサーを使う場合

シーケンサーやコンピュータを使って、実際にTX802で音を出してみましょう。

TX802では最大8トラック分の音を出すことができますが、ここでは一番簡単な、1トラックだけの演奏を例にして説明します。

まず、第1章の「TX802の用途と接続の方法」を参考にして、TX802を正しく接続してください。

続いて次のように操作を行ってください。

## 音を出してみよう

### ① 各機器の電源を入れます。

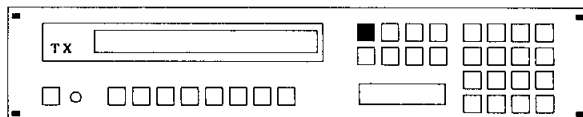
第1章の「電源の入れ方と切り方」を参考にして正しい手順で電源を入れてください。

ディスプレイ表示は次のようになります。

この表示を確認してください

PERFORMANCE	INT01	◀	Hall Orchestra	>				
A11	←	←	←	A15	←	A15	←	A15

すでに、TX802を使用している場合には、前回の使用で電源を切る直前のディスプレイ表示になります。上のような表示にするには [PERFORM SELECT] (パフォーマンスセレクト) キーを押します。



PERFORM  
SELECT

### ② シーケンサーあるいはコンピュータのシーケンスソフトウェアで1トラック分の演奏データを作成します。(すでに作成されているものでもかまいません)

- 出力チャンネルは1~16までのいずれでもかまいません。

### ③ シーケンサーあるいはコンピュータに演奏をはじめさせます。

指定された演奏をTX802がはじめます。

- この状態では8和音まで出せる設定になっています。
- 音が出ない場合は次ページをご覧ください。
- 演奏データとともにプログラムチェンジデータを作成しておくと、音色切り換えを行うことができます。(171ページ参照)

## 第2章 まず、音を出してみよう

## シーケンサーを使う場合

### 音が出ない場合

MIDIケーブルで多くの機器が接続されていると、「あれっ音が出ない!」といったことがしばしば起こります。でも、あわてないでください。落ち着いてゆっくり、音の出ない原因を捜しだし、適切に対処してください。考えられる原因としては次のようなものがあります。

- (1) 電源が入っていない。
- (2) 接続が間違っている。
- (3) 接続がはずれている。
- (4) キーボードアンプなどのボリュームが上がっていない。
- (5) シーケンサーの設定が適切でない。(MIDI送信チャンネルの設定など)
- (6) TX802のパフォーマンスの設定やボイスの設定(MIDI受信チャンネルや内部ボリュームなどの設定)が適切でない。

TX802に直接ヘッドホンをつないで、音が出れば上の(1)~(4)が原因と考えられます。

キーボードを弾いてMIDI信号がTX802に入力されると、ディスプレイ下の[1]~[8]のインディケータが点滅します。点滅しない場合は、(5)または(6)が原因と考えられます。(5)の場合はシーケンサー付属の取扱説明書を参考にして、正しくMIDIデータが出力されるように設定してください。

以前にTX802を使用した場合には(6)が原因であることも考えられます。3章以降を参考にして、原因を見つけて対処してください。特にMIDI受信チャンネルの設定が出力側の機器と同じチャンネルになっているかどうかを次の方法で確認、変更してください。

- ① [PERFORM EDIT] (パフォーマンスエディット) キーを押します。
- ② ディスプレイ下のパラメーターセレクトキーの[1]を押します。

次のようなディスプレイ表示になります。

これがMIDI受信チャンネルです →

PERF.EDIT1> Receive channel (<Allr asgn)
1 4 ← ← ← ← 1 ← 1 ← 1 ← 1

- ③ 受信チャンネルがシーケンサーなどの出力チャンネルと一致しているか確認してください。
  - ・シーケンサーなどの送信チャンネルがわからない場合は、“om” (オムニオン; すべてのチャンネルのメッセージを受信できる状態) にします。この操作は手順④で説明します。
  - ・シーケンサーなどの送信チャンネルと一致している場合や、“om” になっている場合にはこの点が原因ではありません。[PERFORM SELECT] キーを押して元のディスプレイ表示に戻ってください。
- ④ カーソル“4”がその数字の右側にあることを確認します。
  - ・カーソルが数字の右側でない場合は[←] [→] キーを使ってカーソルを移動します。
- ⑤ [+1] キーを使って“om”の表示にします。
  - “om”は“16”の次に表示されます。
  - [PERFORM SELECT] キーを押して元のディスプレイ表示に戻ってください。

### 音色を変えてみよう

今度は音色を変えてみましょう。操作は前項の「MIDIキーボードを使う場合」と同じですので、19ページを参照してください。

## 第2章 まず、音を出してみよう



# 第3章

## TX802の基礎知識

この章ではTX802をお使いになる上で必要な基本的なことを説明します。はじめてTX802をお使いになる方は必ずこの章をお読みください。

●ボイスとパフォーマンスについて .....	24
●モードについて .....	28
●演奏するモードについて .....	30
●パフォーマンスの選択 .....	32
●いろいろな項目の指定方法について ....	35
●コンペアの使い方 .....	41
●カートリッジについて .....	42



# ボイスとパフォーマンスについて

TX802を使う上で必ず最初に覚えて欲しい言葉が「ボイス」と「パフォーマンス」です。

## ボイス

ボイスとは音色のことで、ひとつずつ番号と名前が付けられています。また、自分でボイスを作成した場合にも名前を付けて保存（ストア）します。

ボイスは次のような3種類に分類することができます。

### ●プリセットボイス

TX802にはあらかじめ128種類のボイスが内蔵されています。この内蔵されているボイスのことをプリセットボイスと呼びます。プリセットボイスはそれぞれ 64 種類ずつ、プリセットボイス A (Preset A) とプリセットボイス B (Preset B) に分けられます。このプリセットボイスは消したり、書き換えたりすることはできません。

### ●インターナルボイス

ユーザーが自分で作ったボイスは本体内に64種類まで保存（ストア）することができます。このボイスのことをインターナルボイス (Internal voice) と呼びます。プリセットボイスに変更を加えて、インターナルボイスとして保存することもできます。お買い上げの時点ではプリセットボイス A と同じボイスが入っています。

### ●カートリッジボイス

RAMカートリッジを使うと、ひとつのカートリッジ（ひとつのバンク）に64種類のボイスを保存することができます。このボイスのことをカートリッジボイス (Cartridge voice) と呼びます。また、ROMカートリッジ（ボイスが書き込まれた状態で市販されるカートリッジ）のボイスも同様にカートリッジボイスと呼びます。（カートリッジについては182ページをご覧ください）

## TX802のボイスの分類

### プリセットボイス

Preset A	Preset B
A01 MellowHorn	B01 SuperBass
A02 SilvaBrass	B02 StringBass
A03 ReverbBras	B03 SkweekBass
\$ \$	\$ \$
A63 MaleChoir	B63 Thunderon
A64 Whisper2	B64 Science

あらかじめ内蔵されているボイス

### インターナルボイス

Internal
I01 KUTIBUE
I02 TAIKO
I03 WOODBASS
\$ \$
I63 SYAMUHATI
I64 DOOR

ユーザが作成、保存したボイス

### カートリッジボイス

Cartridge
C01 SYAMISEN
C02 TUZUMI
C03 OODAICO
\$ \$
C63 AINOTE
C64 KIRAKIRA

カートリッジに保存されているボイス

カートリッジがセットされているときのみ使用できます

※ "A01", "B64", "I03"などをボイス番号 "MellowHorn" や "TAIKO" などをボイス名と呼びます。

## ボイスとパフォーマンスについて

### 同時にさせる音の数とボイスの数

TX802は8つの音源（音を出す装置）が入っています。

この音源はそれぞれ2和音を同時に出すことができます。このためTX802全体では最大16和音を同時に出すことができます。

音源にはそれぞれ別のボイスを割り当てることができます。すなわち、最大8つのボイスを同時に使うことができます。同時にさせる音の数とボイスの数の関係については下の図をご覧ください。

#### 同時発音数とボイスの関係（○はひとつの音を示します）

「←」は左となりの音源と同じボイスが割り当てられていることを示しています。

#### すべての音源をボイス“A01”に設定した場合

音源番号	1	2	3	4	5	6	7	8
ボイス番号	A01	←	←	←	←	←	←	←
使える音数	○○	○○	○○	○○	○○	○○	○○	○○

この場合はボイス“A01”の音色で最大16和音まで出すことができます。

#### 音源を4つずつボイス“A01”と“B02”に分けた場合

音源番号	1	2	3	4	5	6	7	8
ボイス番号	A01	←	←	←	B02	←	←	←
使える音数	○○	○○	○○	○○	○○	○○	○○	○○

この場合はボイス“A01”、“B02”ともに最大8和音まで出すことができます。

#### 次のように音源にボイスを割り当てた場合

音源番号	1	2	3	4	5	6	7	8
ボイス番号	A01	←	B02	←	←	←	I05	←
使える音数	○○	○○	○○	○○	○○	○○	○○	○○

この場合はボイス“A01”で4和音、ボイス“B02”で8和音、ボイス“I05”で4和音まで出すことができます。

この機能は次のようなときに利用します。

- (1) ひとつのキーを押すことで、同時に何種類もの音を出したいとき。
- (2) キーボードを分割（スプリット）してその上下で違う音を出したいとき。この場合は各ボイスについてノートリミットのハイとロー（Note limit high, Note limit low）を適切に指定します。指定によって最大8つまでのキースプリットを行うことができます。
- (3) シーケンサーから異なるMIDI送信チャンネルで送られたデータをふり分けて、各チャンネルの同時演奏を行いたいとき。この場合は各ボイスについてMIDI受信チャンネルを適切に指定します。

## ボイスとパフォーマンスについて

### パフォーマンス

前ページで説明したような同時に出せる16音の全体のボイス構成（8つの音源にどのようなボイスを割り当てるかという設定）をパフォーマンスと呼びます。

音源番号	1	2	3	4	5	6	7	8
ボイス番号	A01	←	←	←	B02	←	←	←
使える音数	〇〇	〇〇	〇〇	〇〇	〇〇	〇〇	〇〇	〇〇

この各音源に対するボイスの割り当ての設定をパフォーマンスと呼びます。

※実際には、この他にもさまざまな情報がパフォーマンスには含まれています。（各ボイスのボリュームやMIDI受信チャンネルなど）

パフォーマンスは次の2種類に分類することができます。

#### ●インターナルパフォーマンス

パフォーマンスは本体内に64種類保存（ストア）することができます。このパフォーマンスをインターナルパフォーマンス（Internal performance）と呼びます。

お買い上げの時点ではヤマハで作ったパフォーマンスが入っています。

#### ●カートリッジパフォーマンス

カートリッジ（ひとつのバンク）には64種類のパフォーマンスを保存（ストア）することができます。このカートリッジに保存されているパフォーマンスをカートリッジパフォーマンス（Cartridge performance）と呼びます。（カートリッジについては182ページをご覧ください）

**TX802のパフォーマンスの分類**

**インターナルパフォーマンス**

Internal	
INT01	MOON 1
INT02	MOON 2
INT03	SUN 1
⋮	
INT63	GET IT
INT64	SOMEONE

ユーザが作成、保存したパフォーマンス  
（お買い上げの時点ではヤマハで作った  
パフォーマンスが入っています）

**カートリッジパフォーマンス**

Cartridge	
CRT01	YAMA 1
CRT02	KAWA 2
CRT03	TANI 1
⋮	
CRT63	HARU
CRT64	HUYU

カートリッジに保存されているパフォーマンス

カートリッジがセットされているときのみ使用できます

※ "INT01"や"CRT03"などをパフォーマンス番号、"MOON 1"や"YAMA 1"などをパフォーマンス名と呼びます。

## ボイスとパフォーマンスについて

---

このパフォーマンスを上手に使うことで、ライブのときなどにすばやく、確実なボイスチェンジを行うことができます。たとえば、次のようにパフォーマンスを保存しておきます。

(例)

- INT01 MOON 1 .... 曲「ムーンビーチは牡羊座」のイントロ。ピアノとブラスの同時発音
- INT02 MOON 2 .... 曲「ムーンビーチは牡羊座」のソロ。キースプリットの上部はピッコロ、下部はオルガンの音。
- INT03 SUN 1 .... 曲「サンセットジャングル」のサビ。コンガとスチールドラムの同時発音。

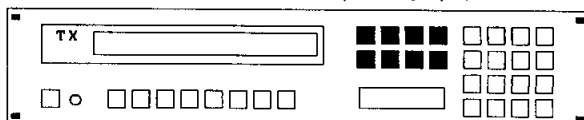
# モードについて

ボイスとパフォーマンスの関係については大体おわかりになっていただけたと思います。

さて、次に説明するのは「モード」という言葉です。

TX802ではボイスやパフォーマンスなどの細かな設定を限られたディスプレイ上で行ないます。そのためにモードセレクトキーで「何の設定を行うディスプレイ表示にするか」を選択します。この「ディスプレイの状態」のことをモードと呼びます。モードには次のような種類があります。

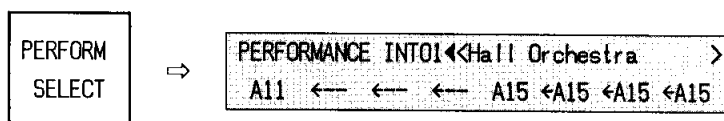
モードセレクトキー



## ● パフォーマンスセレクトモード

パフォーマンスを選択できる状態です。通常、TX802を使うときにはこの状態にしておきます。

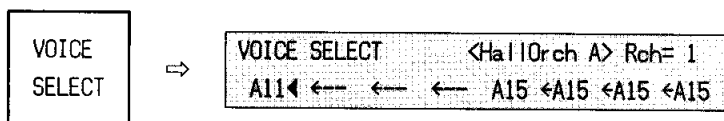
[PERFORM SELECT] (パフォーマンスセレクト) キーを押すとこのモードになります。



## ● ボイスセレクトモード

ボイスを選択できる状態です。パフォーマンスのボイス構成もこのモードで行います。

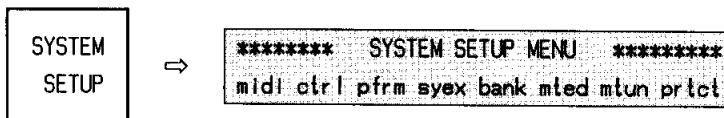
[VOICE SELECT] (ボイスセレクト) キーを押すとこのモードになります。



## ● システムセットアップモード

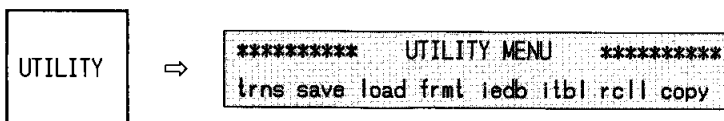
チューニングやMIDIのプログラムチェンジの設定など、TX802全体に関する設定を行う状態です。

[SYSTEM SETUP] (システムセットアップ) キーを押すとこのモードになります。この表示から設定したい項目を選択すると、さらにディスプレイ表示が変わります。



## ● ユーティリティーモード

全データのカートリッジとのやりとりや、カートリッジのフォーマットなどの機能を行う状態です。[UTILITY] (ユーティリティー) キーを押すとこのモードになります。この表示から使いたい機能を選択すると、さらにディスプレイ表示が変わります。



## モードについて

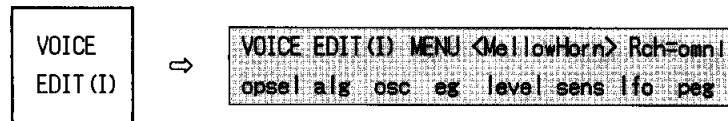
### ●パフォーマンスエディットモード

パフォーマンスを作成、変更する状態です。[PERFORM EDIT] (パフォーマンスエディット) キーを押すとこのモードになります。この表示から設定したい項目を選択すると、さらにディスプレイ表示が変わります。



### ●ボイスエディット (I) モード

ボイスを作成、変更する状態です。ボイスエディットは、音色自体を設定するボイスエディット (I) モードと外部からのコントロールなど (フットコントローラーなど) を設定するボイスエディット (II) モードに分かれています。[VOICE EDIT (I)] (ボイスエディット I) キーを押すとこのモードになります。この表示から設定したい項目を選択すると、さらにディスプレイ表示が変わります。



### ●ボイスエディット (II) モード

ボイスを作成、変更する状態です。[VOICE EDIT (II)] (ボイスエディット II) キーを押すとこのモードになります。この表示から設定したい項目を選択すると、さらにディスプレイ表示が変わります。

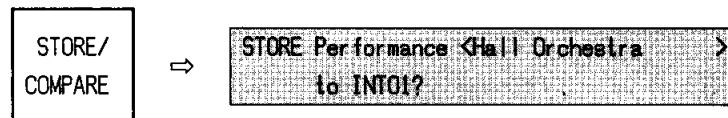


### ●ストア、コンペアモード

パフォーマンスやボイス、マイクロチューニングを本体内やRAMカートリッジに保存するときと、パフォーマンスやボイスのエディット中にエディット前後の音を比較するときを使うモードです。

[STORE/COMPARE] (ストア、コンペア) キーを押すとこのモードになります。押したときの状態によってディスプレイは異なります。

パフォーマンスセレクトモードで [STORE/COMPARE] キーを押した場合



ここから、各モードを使った操作の方法を説明していきます。パフォーマンスセレクトモードについてはこの章で、ボイスセレクトモードとパフォーマンスエディットモードについては4章で、ボイスエディットモードについては5章で、システムセットアップモードとユーティリティーモードについては7章で、ストア、コンペアモードについては関係する各所で説明します。

# 演奏するモードについて

TX802では、前ページで説明したどのモードでも音を出すことができます。

しかし通常の演奏は、あらかじめ作成されているパフォーマンスをすぐに切り換えられる「パフォーマンスセレクトモード」で行います。

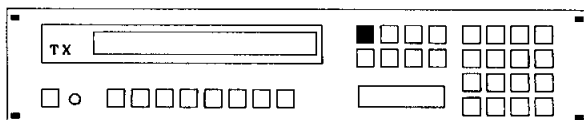
ここでは、このパフォーマンスセレクトモードについて説明します。

## パフォーマンスセレクトモード

通常の演奏はパフォーマンスの選択ができるパフォーマンスセレクトモードで行います。

```
PERFORMANCE INT01<Hall Orchestra >
A11 <-- <-- <-- A15 <A15 <A15 <A15
```

上のようなディスプレイ表示になっていない場合には [PERFORM SELECT] (パフォーマンスセレクト) キーを押します。



PERFORM  
SELECT

例えば下のディスプレイ表示は、次のような内容を示しています。

パフォーマンスセレクトモードであることを示します。

現在のパフォーマンス番号を示します。4はカーソルと呼び、このカーソルが点滅している部分を変更することができます。

INT はインターナルパフォーマンス、CRT はカートリッジパフォーマンスを示します。

パフォーマンス名を示します。

```
PERFORMANCE INT22<Grand Piano >
A31 <-- <-- <-- <-- <-- <-- <--
```

この表示は左となりのボイスと同じであることを示します。

ボイス番号を示します。

下の行は音源の使い分けを示しています。(2音×8)

したがってこのパフォーマンス"INT22"の設定は次のように、1ボイス"A31"だけで構成され、16和音を出すことのできる設定になっていることになります。

音源番号	1	2	3	4	5	6	7	8
ボイス番号	A31	<	<	<	<	<	<	<
使える音数	〇〇	〇〇	〇〇	〇〇	〇〇	〇〇	〇〇	〇〇

## 第3章 TX802の基礎知識

## 演奏するモードについて

INTとint、CRTとcrtの違いについて

このモードで、「現在のパフォーマンス番号」の表示が“int01”“crt01”のように英字が小文字で表示されることがあります。

これは、そのパフォーマンスに何かの変更があったのに、変更後のパフォーマンスがまだ保存（ストア）されていないことを示します。（たとえばボイスやMIDI受信チャンネルを変更したのにまだ保存していない場合など）

このまま[+1]キーや[-1]キーでパフォーマンスを変更すると、そのパフォーマンスの変更は取り消され、元に戻ってしまいます（160ページのパフォーマンスのリコールの操作で変更した後の音に戻すこともできます）。変更したものをとっておきたい場合は保存の作業を行います。（保存の作業「ストア」については65ページをご覧ください）

例

パフォーマンスセレクトモードで“INT01”を選択して …………… このときの表示は“INT01”

↓

ボイスセレクトモードで、使うボイスを“A01”から“B02”に変更したり、  
パフォーマンスエディットモードでMIDI受信チャンネルを1から2に変更した

↓

そして、パフォーマンスセレクトモードに戻した …………… 表示は“int01”に変わる

↓

- ここで[+1]キーや[-1]キーを押して、別のパフォーマンスを選ぶと変更前のパフォーマンスに戻ります。
- ここで保存（ストア）の作業を行うと、変更後のパフォーマンスが保存され、“INT01”の表示に戻ります。

このパフォーマンスセレクトモードでは、次の2つの操作ができます

- (1) パフォーマンスの選択
- (2) ボイス出力のオン/オフ

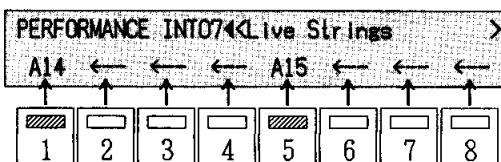
(1)については次の項で説明します。ここでは(2)について説明します。

## ボイス出力のオン/オフ

これは不必要なボイスの音を出さなくするときに使います。

たとえば、次のようなボイス構成のパフォーマンスの場合、ディスプレイ下の8つのキーのうち①と⑤のインジケータが点灯しています。これは、音の出せる状態にあるボイスを示しています。

②③④と⑥⑦⑧はそれぞれ①、⑤と同じボイスなので、代表として①と⑤だけが点灯している。



ここで①または⑤のキーを押すと、ランプが消灯し、そのボイスの音は出なくなります。

この機能を使うと、ひとつのキーで2つのボイスを出しているときに、簡単な操作で片方の音を消すことができます。



# パフォーマンスの選択

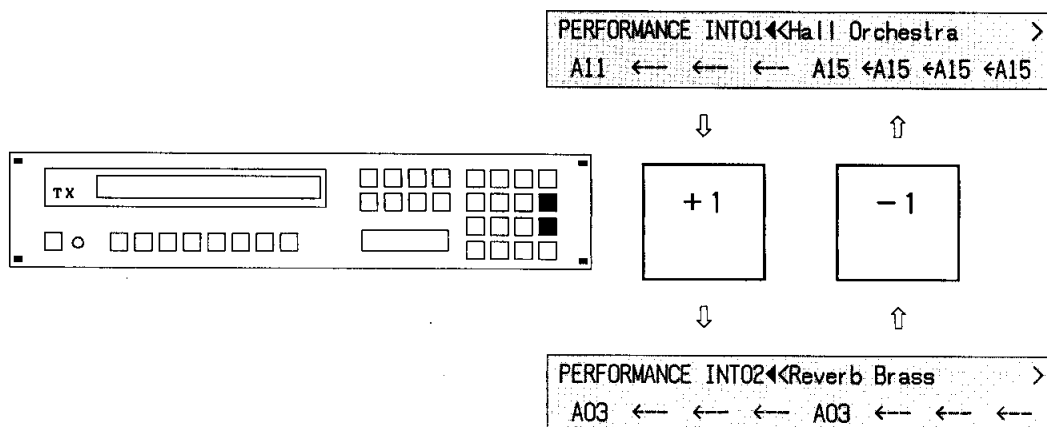
パフォーマンスセレクトモードの状態、パフォーマンスの選択を行います。前に説明したようにパフォーマンスにはインターナルパフォーマンス64種類とカートリッジパフォーマンス64種類（カートリッジがセットされている場合のみ）があり、その中から使いたいパフォーマンスを選択します。

初めてTX802をお使いになる場合、インターナルパフォーマンス INT01～INT64 のうち、INT01～INT54 にはヤマハで作ったパフォーマンスが入っています。この内容については 193ページを参照してください。  
残りの INT55～INT64 は空いていますので、パフォーマンスの保存などの練習などにお使いください。

パフォーマンスを選択する手順には次のような方法があります。

- [+1] キー、[-1] キーを使う方法

次のように [+1] キーや [-1] キーを使ってパフォーマンス番号を増減する方法です。

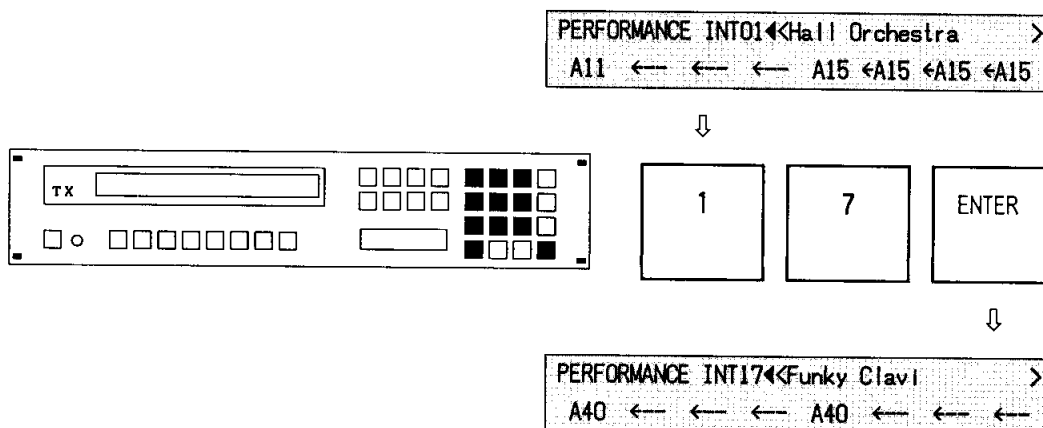


インターナルパフォーマンス"INT01"～"INT64"とカートリッジパフォーマンス"CRT01"～"CRT64"は連続しています。すなわち、"INT64"で[+1]キーを押すと"CRT01"に変わります。カートリッジがセットされていない状態で"CRT"のパフォーマンスを呼び出そうとすると「Cartridge not ready!」と表示されます。また、カートリッジがセットされていない状態でカートリッジボイス (C01, C02 など) を使用する "INT" のパフォーマンスを呼び出そうとした場合にも「Cartridge not ready!」と表示されます。

## パフォーマンスの選択

### ●直接パフォーマンス番号を指定する方法

数字キーを使って直接目的のパフォーマンス番号を指定して、そのパフォーマンスを選択する方法です。目的のパフォーマンス番号のキーを押して、[ENTER]（エンター）キーを押します。

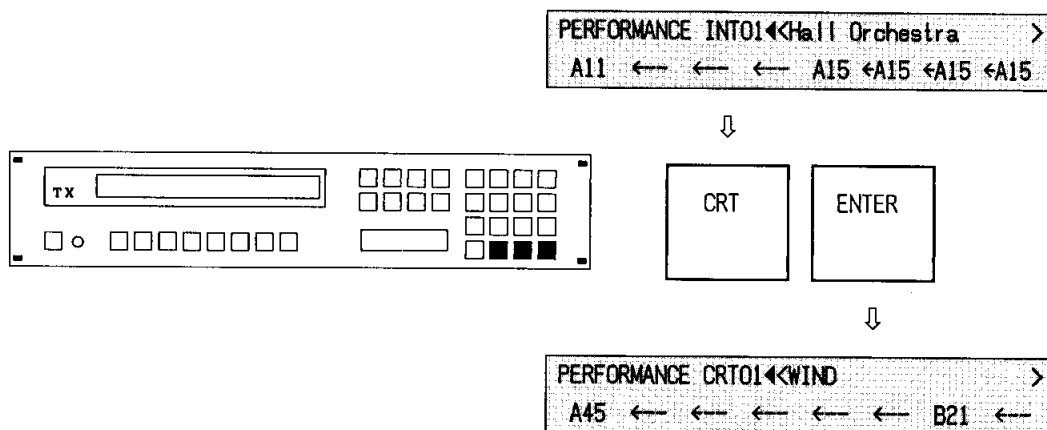


[ENTER] キーを押す前は、指定したパフォーマンス番号が点滅します。この状態ではパフォーマンスは切り換わらず [ENTER] キーを押した時点で指定したパフォーマンスに切り換わります。インターナルパフォーマンスとカートリッジパフォーマンスの切り換えは、次に示す [INT]、[CRT] キーを使う方法と併用することで行います。

### ● [INT]（インターナルパフォーマンス）キー、 [CRT]（カートリッジパフォーマンス）キーを使う方法

これは、インターナルパフォーマンスとカートリッジパフォーマンスの切り換えを行う方法です。

[INT] [CRT] キーを押すと、同じパフォーマンス番号のまま、インターナルパフォーマンス "INT" とカートリッジパフォーマンス "CRT" が切り換わり、その表示が点滅します。続けて [ENTER]（エンター）キーを押します。すると正式に点滅していたパフォーマンスに変わります。



カートリッジがセットされていない状態で "CRT" のパフォーマンスを呼び出そうとすると、「Cartridge not ready!」と表示されます。

## パフォーマンスの選択

数字キーと [INT] [CRT] キーを併用する場合

数字キーと [INT] [CRT] キーは次のように一緒に使うことができます。

```
PERFORMANCE INT01<Hall Orchestra >  
A11 ← ← ← A15 ←A15 ←A15 ←A15
```

↓

CRT	1	7	ENTER
-----	---	---	-------

↓

```
PERFORMANCE CRT174<Space A >  
A15 ← ← ← B12 ← ← ←
```

- MIDIキーボードなどからパフォーマンスを選択する方法

MIDIキーボードやシーケンサーなどから送信されるプログラムチェンジの信号で、TX802のパフォーマンスを切り換えることもできます。(171ページ参照)

# いろいろな項目の指定方法について

パフォーマンスやボイスなどを選択、作成していくときには、前ページのような項目選択の操作や数値や文字の指定の操作が必要になります。

ここでは4章以降のために、これらの操作をまとめて説明しておきます。

おおきく分けて、これらの操作は次の4つに分類できます。

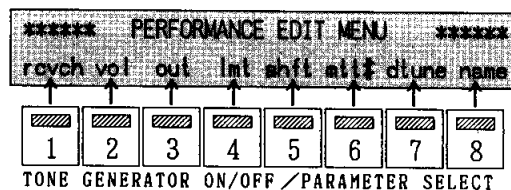
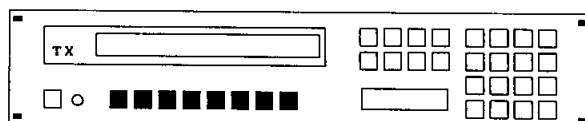
- (1) 各モードのメニューからの選択
- (2) カーソル (←, →, ↑, ↓, F1, F2) の移動
- (3) オン/オフなどの選択
- (4) 数値の指定
- (5) 文字の指定

## 各モードのメニューからの選択

パフォーマンスセレクトモードとボイスセレクトモード以外のモードでは、モードセレクトキーを押すと次のようなメニューが表示されます。(例はパフォーマンスエディットモードのメニューです)

```
***** PERFORMANCE EDIT MENU *****
rcvch vol out lnt shft mlt# dtune name
```

このようなメニューから、目的の作業を選択するときには、[TONE GENERATOR ON/OFF/PARAMETER SELECT] (音源オン/オフ、パラメーターセレクト) キーを使います。この8つのキーは、それぞれディスプレイの下の行の8つの作業に対応しています。



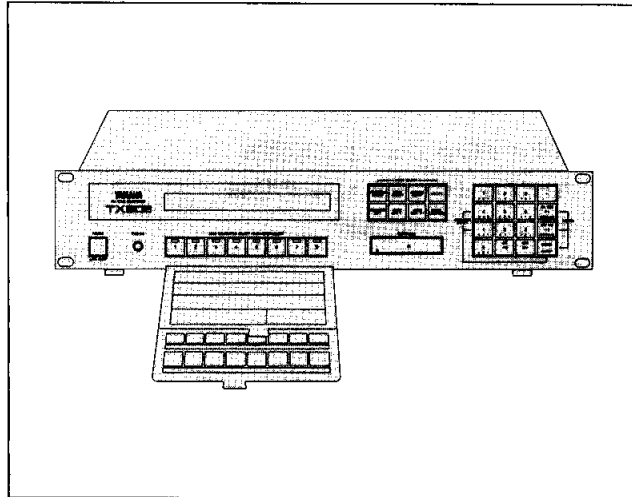
例えば、上のメニューでMIDIの受信チャンネル (rcvch)の作業を選択する場合には [TONE GENERATOR ON/OFF/PARAMETER SELECT] キーの1を押します。

パフォーマンスセレクトモードとボイスセレクトモード以外のモードでは、モードセレクトキーを押した後、必ずこの操作が必要になりますので、確実に覚えておいてください。

## いろいろな項目の指定方法について

---

ガイドシートに各モードのメニューが印刷されています。必要に応じて引き出してご覧ください。



## いろいろな項目の指定方法について

### カーソル (←, →, ↑, ↓) の移動

カーソルは、設定の変更ができる項目を示しています。

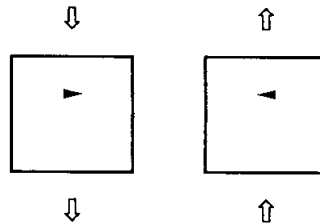
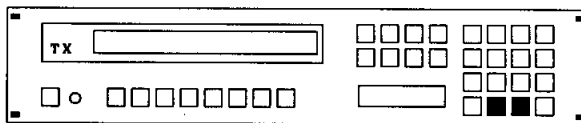
ひとつのディスプレイ表示の中に項目がいくつもある場合には、このカーソルを動かして変更したい項目に合わせます。その後で実際に設定の変更を行います。ひとつのディスプレイ表示の中で、設定できる項目がひとつしかない場合は、カーソルの移動はできません。

#### ● ←, →, ↑, ↓のカーソルの移動

このカーソルの移動は [←] キーまたは [→] キーを使って行います。次の例はボイスエディット (I) のメニューからアルゴリズム (Alg) を選択して表示されるディスプレイ表示です。(↑, ↓のカーソルは文字を書き込む項目のときにだけ表示されます)

現在はアルゴリズム (Alg) の変更ができる状態です

```
>Alg>Fb1>Osc.sync >Transpose >Voice name  
12 7 off midC= C3 HallOrch A
```



フィードバックレベル (Fb1) の変更ができる状態に変わります

```
>Alg>Fb1>Osc.sync >Transpose >Voice name  
12 7 off midC= C3 HallOrch A
```

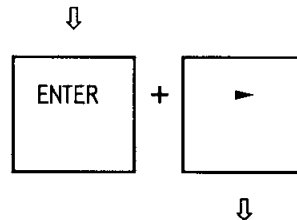
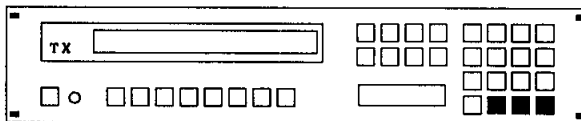
#### ● ←, →のカーソルの移動

このカーソルは、1画面中に2組のカーソル機能がある場合や [←] [→] キーを [INT] [CRT] キーとして使う場合などに表示されます。このカーソルの移動は [ENTER] キーを押しながら、[←] キーまたは [→] キーを押すことで行います。次の例はシステムセットアップモードでマイクロチューニングを設定するときのディスプレイ表示です。

この取扱説明書では、あるキーを押しながら別のキーを押す場合「+」の記号を使って示します。

チューニングの粗調整 (Coarse) のできる状態です

```
SYSTEM6> Mted E2 — F2 — F#2  
Coarse<Fine< 4352 E2 +0( 4352) 4522
```



チューニングの微調整 (Fine) のできる状態に変わります

```
SYSTEM6> Mted E2 — F2 — F#2  
Coarse<Fine< 4352 E2 +0( 4352) 4522
```

## いろいろな項目の指定方法について

### オン/オフなどの選択

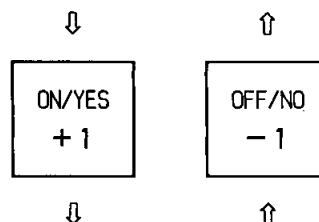
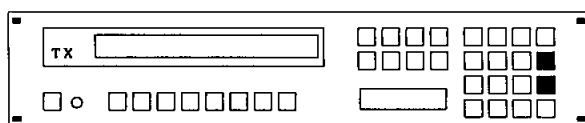
カーソルをある項目に移動したら、その項目の設定の変更を行います。

ここではいくつかの決められた内容（“on” “off” の選択、“I” “II” “I II” の選択など）から選択する項目の操作を説明します。

この場合は、[+1] キー、[-1] キーを使って、次のように行います。

現在はオシレーターシンク (Osc.sync) がオフの状態です

```
>Alg>Fb1>Osc.sync >Transpose >Voice name  
12 7 off midC= C3 Hal10rch A
```



オシレーターシンクがオンの状態に変わります

```
>Alg>Fb1>Osc.sync >Transpose >Voice name  
12 7 on midC= C3 Hal10rch A
```

また、選択の項目が多くある場合（例えばノートリミット C-2～G8の設定など）キーを押し続けることで、項目を早く変化させることができます。

## いろいろな項目の指定方法について

### 数値の指定

ここでは、ボリュームなどのように数値で指定する項目の操作を説明します。

数値には必ず設定可能な最大値と最小値があり、それ以上、以下の設定はできません。

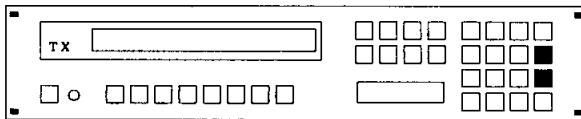
この操作にはつぎのような2つの方法があります。

- [+1] キー、[-1] キーを使う方法

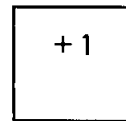
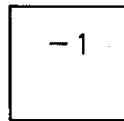
[+1] キー、[-1] キーを使って1つずつ数値を増やしたり、減らしたりします。

キーを押し続けると、数値は早く変化します。

現在はフィードバックレベル(Fb1) が7の状態です



```
>Alg>Fb1>Osc.sync >Transpose >Voice name  
12 7 off midC= C3 Hal10rch A
```



フィードバックレベルが6に変わります

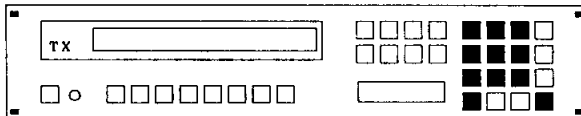
```
>Alg>Fb1>Osc.sync >Transpose >Voice name  
12 6 off midC= C3 Hal10rch A
```

- 直接数値を指定する方法

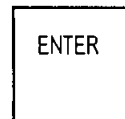
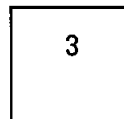
数字キーを使って、直接目的の数値を指定する方法です。0～9のキー、-（マイナス）キーを使って数値を書き込み、[ENTER] キーを押します。

[ENTER] キーを押す前は、書き込んだ数字が点滅します。[ENTER] キーを押した時点でその数値の設定に変更されます。

現在はフィードバックレベルが7の状態です



```
>Alg>Fb1>Osc.sync >Transpose >Voice name  
12 7 off midC= C3 Hal10rch A
```



フィードバックレベルが3に変わります

```
>Alg>Fb1>Osc.sync >Transpose >Voice name  
12 3 off midC= C3 Hal10rch A
```

最大値や最小値をこえるような数値を指定すると、自動的に最大値、最小値が表示されます。

(ただし、正しい範囲以外のボイス番号やパフォーマンス番号を指定すると、以前に選択していたボイスやパフォーマンスが選択されます)



## いろいろな項目の指定方法について

### 文字の指定

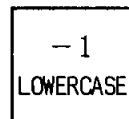
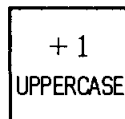
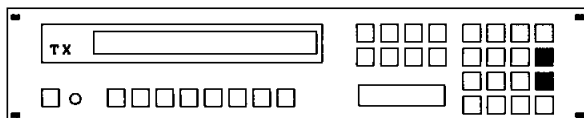
パフォーマンス名 (PERFORMANCE NAME) やボイス名 (VOICE NAME) にはアルファベット (大文字、小文字) や数字、記号を使うことができます。ここではその文字の書き込み方を説明します。

カーソルをボイス名の箇所に移動すると、↓または↑のカーソルに変わり、下の行の先頭文字の下に下線が表示されます。(パフォーマンス名の場合、下線は表示されません)

```
>Alg>Fbi>Osc.sync >Transpose ↑Voice name  
12 7 off midC= C3 Hal10rch A
```

この↑、↓の矢印はアルファベットの大文字、小文字の区別を表し、↑が表示されているときには大文字を、↓が表示されているときは小文字を書き込むことができます。(数字、記号には大文字、小文字の区別はありません)

この矢印の切り換えは、[+1] [-1] キーで行います。[+1] キーを押すと↑ (大文字) に、[-1] キーを押すと↓ (小文字) に変わります。



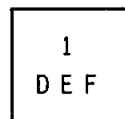
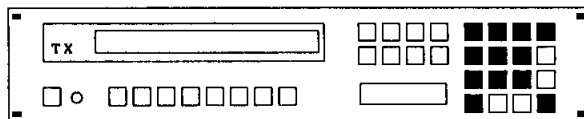
“↑” 大文字

“↓” 小文字

また、下の行の下線は文字を書き込む位置を示します。パフォーマンス名の場合は↑、↓の矢印が文字を書き込む位置を示します。[←] [→] キーを押すと左右に移動します。

文字の書き込みは次の手順で行います。

- ① [←] [→] キーで文字を書き込む位置に下線または↑、↓を移動します。
- ② アルファベットを書き込む場合には、↑ (大文字) と↓ (小文字) を確認、変更します。
  - 数字、記号を書き込むときは、どちらでもかまいません。
- ③ 次のようにキーを必要な回数だけ押して、実際に文字を書き込みます。



1 回押すと“1”  
2 回押すと“D” または“d”  
3 回押すと“E” または“e”  
4 回押すと“F” または“f”  
が書き込まれます。

- 同じキーを5回押すと、1回目の文字に戻ります。
- [ENTER] キーを押すと、下線の位置の文字が消されて、下線がひとつ右に移動します。
- パフォーマンス名は20文字、ボイス名は10文字まで書き込むことができます。

# コンペアの使い方

ボイスやパフォーマンスを作成していく方法のひとつに、すでに作成されているものを加工していく方法があります。

このようなときに、加工前のボイスやパフォーマンスと、加工中のボイスやパフォーマンスとを簡単に比較することができます。これがコンペアの機能です。

この機能により、ボイスの微妙な変化や、全体の音としてのパフォーマンスの変化を聴き比べながら加工していくことができます。

コンペアの機能は [STORE/COMPARE] キーを使って行います。この [STORE/COMPARE] キーは、ボイスやパフォーマンスの保存（ストア）の機能も持っており、このキーを押すときのモードによって機能が変わります。

- |                                          |        |
|------------------------------------------|--------|
| (1) パフォーマンスエディットモードのとき .....             | コンペア機能 |
| (2) ボイスエディットモード（Ⅰ）のとき .....              | コンペア機能 |
| (3) ボイスエディットモード（Ⅱ）のとき .....              | コンペア機能 |
| (4) パフォーマンスセレクトモードのとき .....              | ストアの機能 |
| (5) ボイスセレクトモードのとき .....                  | ストアの機能 |
| (6) システムセットアップモードのマイクロチューニングの設定のとき ..... | ストアの機能 |

上の(1)(2)(3)のモードでボイスまたはパフォーマンスを加工している最中に、[STORE/COMPARE] キーを押すと、ディスプレイに表示されている全てのデータ（パラメータ）が点滅し、加工前の音を聞くことができます。ただし、この状態ではデータの変更はできません。

もう一度 [STORE/COMPARE] キーを押すと、元の状態に戻り、加工中のボイス、パフォーマンスの音が出る状態に戻ります。

選択したばかりのパフォーマンスやボイス（メモリーから呼び出した直後の全く加工していないボイスやパフォーマンス）ではコンペアの機能を使うことができません。

この機能は、特にボイスを作成していくときに大変便利です。おおいに活用してください。

ストアの機能については 65, 116 ページをご覧ください。

# カートリッジについて

---

TX802のパフォーマンスやボイスなどのデータが増えてきた場合や、大切なデータを別に保管しておきたい場合などにRAMカートリッジを使います。

カートリッジの種類(ROMカートリッジ、RAMカートリッジなど)などの細かい点については、182ページで説明します。

ここでは、次のことを覚えておいてください。

RAMカートリッジはフォーマットしないと使えない

新しくお買い上げになったRAMカートリッジは、真っ白な紙のようなもので、まず目が全く入っていません。TX802は、まず目がないとデータを書き込むことができません。

このために、RAMカートリッジにまず目を書き込むことを「フォーマット」と呼びます。

第4章以降の章で、本体内やRAMカートリッジにパフォーマンスやボイスのデータを保存する操作が出てきます。RAMカートリッジに保存する場合、必ずそのカートリッジが適切にフォーマットされていなければなりません。

RAMカートリッジをフォーマットするときには157ページをご覧ください。

## カートリッジについて

### お買い上げの時点でTX802に入っているデータをRAMカートリッジに保存する操作

TX802にはお買い上げの時点で、インターナルパフォーマンスにヤマハで厳選した質のよいデータが入っています。

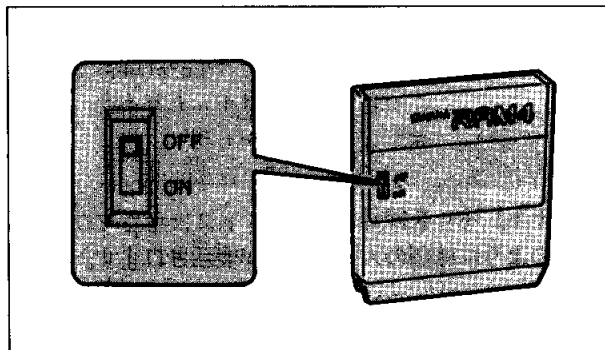
インターナルパフォーマンスは、ユーザーが自分でデータを入れて使うところですので、ユーザが実際にパフォーマンスを作り、保存した時点で、そこにもともとあったデータは消されてしまいます。

お買い上げの時点で入っているパフォーマンスのデータを、後々使うことができるように、パフォーマンスの作成をする前に、次の操作でRAMカートリッジにデータを保存しておくことをおすすめします。

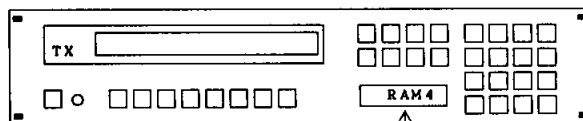
カートリッジをまだお求めになっていない場合は、RAM4などのカートリッジをお求めください。

また、パフォーマンスデータをMIDI情報として出力することもできますので、MIDIデータファイラー (MDF1) や DX7 II FD, QX1を経由してクイックディスクやフロッピーディスクに保存することもできます。データの互換性については 188ページをご覧ください。

- ① RAMカートリッジのメモリープロテクトのスイッチをオフにします。
  - この操作はカートリッジを本体から抜いた状態で行ってください。
  - スwitchのオン/オフは金属製でない、つまようじのようなものをお使いください。



- ② RAMカートリッジを本体にセットします。
  - メモリープロテクトスイッチが上を向く方向でしっかり差し込んでください。

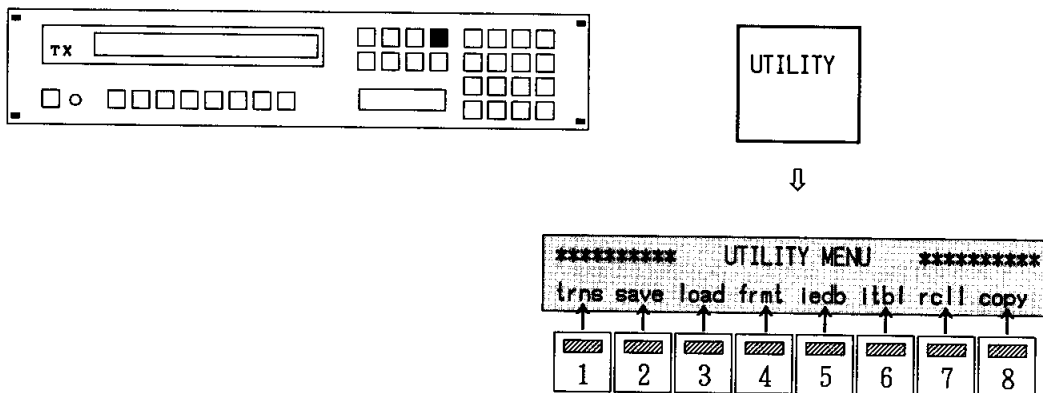


ラベルがこの方向を向くように差し込む

## カートリッジについて

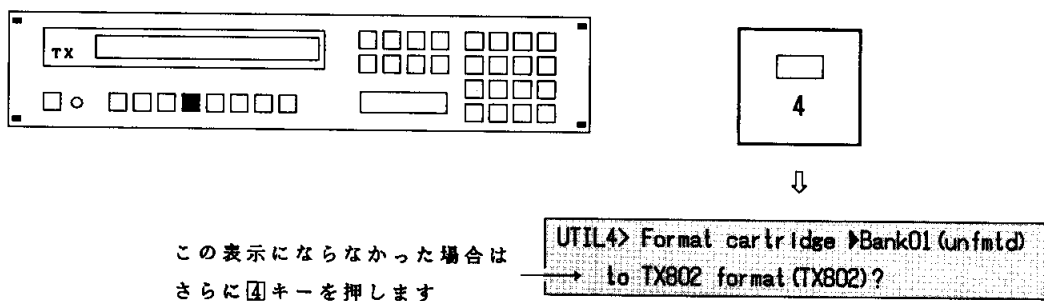
③ 【UTILITY】 キーを押します。

ユーティリティモードになり、次のようなメニューが表示されます。



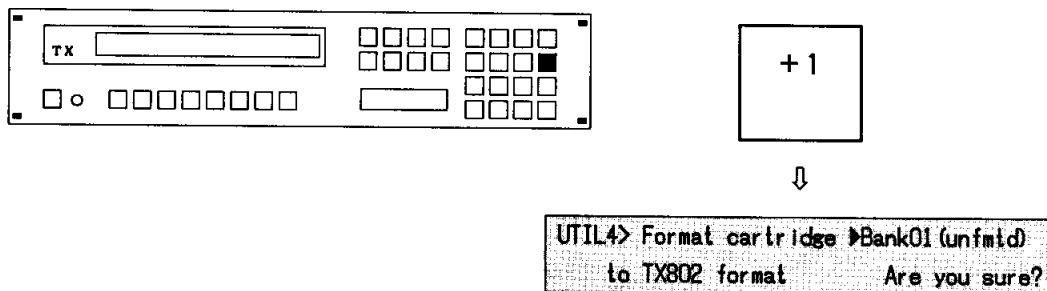
④ ディスプレイ下の[4]キーを押します。

次のように“TX802 format”と表示されなかった場合は、何回か[4]キーを押してください。



⑤ [+1] キーを押します。

次のように確認のメッセージが表示されます。



## カートリッジについて

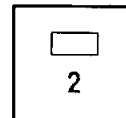
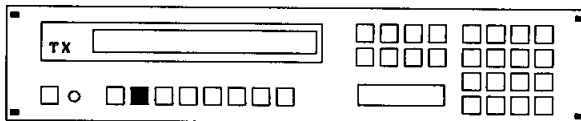
- ⑥ もう一度【+1】キーを押します。

フォーマットが終了し、“Completed!”と表示され、カッコ内が(TX802)に変わります。

```
UTIL4> Format cartridge ▶Bank01 (TX802 )
      to TX802 format           Completed!
```

- ⑦ ディスプレイ下の[2]キーを押します。

次のような表示に変わります。



```
UTIL2> Save all data to cartridge?
```

- ⑧ 【+1】キーを押します。

次のように確認のメッセージが表示されます。

```
UTIL2> Save all data to cartridge?
Are you sure?
```

- ⑨ もう一度【+1】キーを押します。

RAMカートリッジにデータをすべて保存すると“Completed!”と表示されます。

```
UTIL2> Save all data to cartridge?
Completed!
```

- ⑩ RAMカートリッジを本体から抜き、メモリープロテクトのスイッチをオンにします。

これで、お買い上げの時点で入っていたパフォーマンスやボイスなどのデータは、RAMカートリッジに保存されました。

保存したデータを再び本体に、すべて戻す場合は、155ページの「ロード」の操作を行ってください。

### 注意

インターナルパフォーマンスの INT55~INT64 は練習などのために空けてあります。

RAM カートリッジをお求めになっていない場合、新しく作ったパフォーマンスを保存するときには INT55~INT64 に保存してください。こうすればヤマハで作ったパフォーマンスを残しておくことができます。

(

(